

---

# 龍の御使い

おでん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

龍の使い

### 【NNコード】

N3887Z

### 【作者名】

おでん

### 【あらすじ】

神に飛ばされた先は異世界の龍の巣。え！？番いになれ？  
龍の血と加護を得た主人公は龍神信仰の布教の旅に出る。

初執筆初投稿

考えすぎると投稿できなくなりそうなので、推敲はしても重ねない予定です。なので乱文乱筆誤字脱字不条理ご勘弁。  
書いてるうちにあらすじと変わる可能性あり。

# 第一章 神と龍とサラリーマン やのー

龍の使い

## 第一章 神と龍とサラリーマン

### その一

服部東司は陶器製の小物を作る工場に勤めるデザイナーだ。と言えばいかにもかつこよく聞こえるが、その実はチーフデザイナーでもある若社長（一代目）のアシスタント……いや更に厳密に事実を言えば、

デザイナー5・雑用2・工場との折衝役2・出荷作業1  
と書つたところであり、更に更に詳細に言えば「デザインの仕事」といつても若社長の作つた「デザイン」を工場のライン向けに最適化する作業が半分を占めており、自分の職種を人に説明するとき、「デザイナーです！」と言い切るのに躊躇してしまい、「デザイナー……とか色々やつてます……」とつい言つてしまつような立場かつ性格だった。東司自身も、もう少しデザイナーらしい仕事がしたいとは思つていたが、小さい会社故に「デザイン」に専念出来ないのがしょうがない事で有る事も理解していたし、現代日本では斜陽の陶器産業において「デザイン力」と企画力で売り上げを持ち直していつている若社長の事は年下とは言え尊敬していた。だから若社長からの飲みの誘いも、（はあ今日の飲みは愚痴だろうなあ……）と推測は付いていたが断らず付き合つていたのだった。

「いやー！ 本当に伊那商会はなめてるよー。おかげで俺の苦労も服部さんの苦労も全部無駄だよ！ ……おねーさんお湯割りお代わりー！」

若社長が生中を一杯空け更に焼酎の一一杯目を頼みつつ愚痴る。

「かなり無理矢理納期ねじ込まれましたしね・・・まあ俺の苦労はいいんすけど、社長がその仕様じゃ安定しないってあれだけ熱弁したにも関わらずですかね」

俺は三杯目の生中をちびちび飲みながら相づちを打つた。

「そりゃなんだよー。時間が無いからって簡易発注で進めちゃつた俺が悪いっちゃ悪いんだけど、あいつら”多少質が安定しなくてもそちらのせいにはしませんから!”とか言つといて、問題が起きたら担当は来ずに上司が出てきて”君の会社は問題がある製品を納める会社なのかね?”とか”担当は安定しないなんて話は聞いていないと言つていい”

だぜ！？一瞬あの熱弁は俺の妄想だったのか！？と自分を疑つたよ！ボレナレフだよ！」

「まあ相手は大会社ですし、間接的とはいえ社内でも定期的に仕事が来ている以上そこまであからさまにすつとぼけられると何とも成らんのが腹立ちますよねえ・・・あつ、ちなみにボルナレフです社長」

「レでもルでもポロナレフでもオーケー、考えるな感じろ！通じたんだから正解！」

「まあ確かに意味は完璧に伝わりましたけどね・・・しかし何かしらの手で仕返しきれないもんすかねえ正直釈然としませんよね」

「んー・・・」

若社長がどて煮（モツの味噌煮・中京のソウルフード）を頬張り咀嚼しつつ目を閉じ考え込むのを見て、俺も焼き鳥に七味を振りかけて食べる。

（塩が濃いな・・・七味はやめとけば良かったかな・・・昔は塩辛い位の方がうまいと思ってたけど最近少しずつ苦手になってきたな・・・）とか考えていると、

「もうちょっと粘つてどうにか条件引き出すへりこしかい手はないなあ・・・むかつくなあ・・・」

苦い顔をして若社長が呟く。

「いつそ俺が心労で倒れた事にしてしばらく旅行にでも行ってくるから、その間に服部さんがそれをネタに交渉するとかやってみる？」

と社長がいたずらっぽい子のような笑い顔でこっちを見るので、こちらも演技がかつた感じで手を横に軽く広げて首を振りつつ応える。

「いやいや社長・・・社長がいないと会社が回りませんから。心を鬼にしてここは私が行きましょう！・・・経費で！」

「・・・じゃ病名は淋病ね！社内にも広めとくから！」

「いや・・・それは勘弁してくださいよ」

と二人で笑い合つた時だった。

まさか笑い話の冗談が十倍増しで現実になるとは思わなかつたよ。

2011年11月25日（金） 21時25分

享年32歳

死亡原因：急性心筋梗塞

それが服部東司がこの世界に残した最後の記録だった。

## 第一章 神と龍とサラリーマン やのー

### 第一章 神と龍とサラリーマン

#### その一

思考はハッキリしている。いや、多分ハッキリしてるんだと思つ。だといいな。

この状態は何だう? 寝てるのか? 起きてるのか? なんだかハッキリしません。

まず体が動かない。体の状態としては寝てるんだと思われます。体の裏側に何となく接地感がありますから。とはいってもその感覚は非常に薄い物で、その上、体は動かないときたもんです。金縛りだろうか? どきどき。つーか俺今呼吸しているのが怪しいんですが。笑い事じやないけど(笑)

体の感覚が非常に薄いので単に分からないだけかも知れないけどね。全身麻酔されているのだろうか? 深く考えるとパニックになりそうな感じだし、思考は(多分)正常だから問題ないのだろうとその問い合わせて眼をつぶる。

そんな訳で心の眼は一日閉じたけど肉体的な眼はずつとつぶります。てか、眼がおかしくなつているという可能性にも眼をつぶりたいです。先ほどから眼をつぶっているから見えないのか、眼を開けていても見えないのか、判断が出来ません。

そして聴覚これが今のところ一番頼りになりそう。と言つのも先ほどからなにやらぼそぼそと、しかし小さい音量の割には明瞭に声(音?)が聞こえますからね。

ん? なんで明瞭なのに声か音か分からないかつて?

理由は簡単。あからさまに聞いた覚えのない感じなんですよ。数人で入り乱れて三倍速のスカットマン・ジョンを歌つてると言つのが、私の感想です。ええ何が何だか・・・何となく声っぽい印象

はあるんですが、微妙なところです。

ちなみに味覚嗅覚はまったく感覚がないと来ました。まさに天舞宝輪。これだけ感覚が封じられていれば金色戦士にも劣らぬ力が手に入りそう。転職するか？鳳凰戦士。いやあ一度は言つてみたいよね。”戦士に一度見た技は一度とは通用しない！”。いやあ、とは言いつつ結構何度も同じ技食らつてたよね彼。言つならばあれも一種のフラグなんだろうか……。

いやそんな話はどうでも良い。今一番の問題は鳳凰戦士に転職するかどうかだ！

どうするー？ア イフル！ あの犬可愛いよなあ・・・所で犬や猫の可愛さって小さいからこそだと俺は思うんだ。確かにあの犬のつぶらな眼はもうたまらんですたい！なんだけど、もしあの犬が二メートルのサイズだったら、ぶっちゃけ怖いだろう。あの眼もつぶらな瞳というより表情の感じ取れない不気味な瞳になっちゃう気がするのか。つまり何が言いたいのかといふと身長180の俺も身長50センチくらいなら可愛い・・・いくないか。不気味なだけか・なるほど俺にロリコンの素養が無い事が分かつた。今風の言葉で言つたら、ロリコンさんがYESロリコン、NOタッチだったから、俺はNOロリコン、YESタッチだな。つまり俺はロリコンじゃないから触つてもおk。うへへ、夢が広がりまくりんぐ。ん？いえいえ、ほんと自分ロリコンじゃないつすから！自分真面目つすから！本気視と書いてマジメつすから！。見るだけつす、本気で見るだけつすから！YESロリコン、NOタッチですから！ つーか32から見ると女子高生あたりでもロリコンだよね。

いやそろそろ話を本題に戻そ。

今俺が考えなくてはいけない事は鳳凰戦士に成るか否かの筈だ。まず俺が鳳凰戦士に転職するには五感を封じる必要がある。つまり触感が封じられていないと、俺は鳳凰戦士になれない。

鳳凰戦士になると、いやでもノタッチ状態。

はい。転職しない事決定！

ふう・・・危ないところだった。もつ少しで孔明の罷にまると  
ころだつたぜ・・・さすが諸葛孔明。中国二千年の罷だつたな・・・  
。

さて、と・・・なんやかやと眼を丸りじてみたけび、やつぱり  
五感が復活しねー・・・三倍速スカッシュマン・ジョンは相変わら  
ず聞いてると頭おかしくなりそつだし。

うがあああ・・・

いや待て落ち着け落ち着くんだ俺。まずはもう一度認識把握だ。  
名前は服部東司三十二歳。

年齢は・・・だから三十二だよ。

身長180cm 体重80kg

スリーサイズは上から82・62・78位が遙か遠き理想郷。  
株式会社 陶器のデザイナー（筆者は とか（株） ×  
みたいな社名の会社をリアルで見た事あるけど、 陶器は大丈夫  
だと良いなあ・・・）

年収七百万。・・・程欲しい。現状だと中々貯金が貯まらないん  
だよなあ・・・。

いやその話は取り敢えずどうでも良い。いや良くはないか、いや  
良い。良いつていってんだよ！虚しくなるからもう止めてください。  
お願ひします・・・。

さてさて、えーと何だっけ？・・・ そうだ社長と飲んでたんだ。  
んで急に胸が痛くなつて・・・やべー・・・俺ジョッキ倒した記憶  
があるわあ・・・ガシャーンって音も記憶にあるから、割っちゃつ  
たなこれは・・・いや、それも良くはないけどほんとどうでも良

い。

えーと・・・確か胸がどんどん苦しくなったんだ・・・それで倒れて・・・

げつ、俺本当にまずいのか!・・・うわっどうなってんの!?  
これ夢じゃないのか?

おっ? あれ? おおっ!? なんだか目の前が明るくなってきた!  
た!?

龍歿 27012年

聖カイン歿 815年11月25日 21時25分

神の右手により転生

転生後最初の言葉 「え? ドラゴン? ... やっぱり夢か? ...」

それが服部東司が惑星クラチカに残した最初の記録だった。

## 第一章 神と龍とナラコーマン やのー（後書き）

12月15日改訂しました

# 第一章 神と龍とサラマン ノの三

## 第一章 神と龍とサラマン

その三

朝のまどろみは、ふつわふわで蕩けるよつこ甘い。

言つならば、蜜の川のせせらぎを大きな綿菓子に寝転がつて流れのままにたゆたう様な物だ。手を伸ばし黄金の流れを掬い取り、指の間からさらさらと川に返す。

そんな美しき幻想の世界。

蝶よ花よ妖精よ。そんな存在しか許されない世界。ならば人は何故この世界に永住しないのか。

それはきっと川を覗き込んだときに気づくからだ。自分という存在がこの世界における唯一にしてもつとも許せない異物で有る事に。だが、例えこの身が異物であつても今はもう少しこの世界にお邪魔しよう。

今ならきっと許してもいいえるはずだ。

なぜなら・・・

起きたくないんだよね。むこやむこや。

東司は非常に寝起きが悪かった。少しでもまどろみを楽しむために会社まで自転車で5分、車で2分のアパートに引っ越ししたくらいの筋金入りだった。

しかしそんな睡眠におけるクライマックスでありハッピーエンドを邪魔する敵の魔の手が迫る。

「あ・な・た？ 起きてください？」朝食の用意が出来ましたよ

？」

”敵の魔の手”を訂正。

むしろクライマックスがフルスロットルでハッピートゥルーホン  
ドな模様。

「おおお素晴らしいいいい・・・

そう・・・思えば、今まであまり多くはないが付き合った事のある女性は

「ちよつとー、そろそろ起きてくれないと遅刻するんだけじー」  
とか。

「じ飯は交互でつて私言つたよね?」だつたもんな。

いや、決してそれがおかしいとは思わないが、ほら・・・有るじゃないですか、男の夢つていうか、お約束つていうか。正直あざとい台詞だと分かつていても逆らいがたい本能を揺さぶられる一撃というか、ゆさゆさ揺らされた所をがばりんちょの朝から遅刻上等！ YESモンキー マジックツツみたいなさつ！

よーし、完全に目も覚めた事だし、如意棒もReadyだし、やつてみるか！ ゆさゆさがぱりんちよ！

「ぬう・・・こつもの事ながら中々起きんの・・・まあ寝かせておくかのう」

え？・・・ええええ・・・せつかくスーパーがばりんちょタイムの予定だつたのにー？

ショックだ・・・鬱だ寝よう・・・

「といふかじや、起きとるじやろ？ ぬじさま 主様。それだけ鼻息が変わつたらばればれじやぞい。」

まあ そうだよね。

東司は「うい・・・おはよー、ゆうとこ」と思えて体を起こした。田の前には藍色の地に白色の花模様、薄い桜色の帯という着物を着た美しい女性が畠に膝を揃えて腰を下ろして居る。

東司は布団に座つたまま頭を搔きながら、その女性を改めて眺める。

見た感じの年齢は20代前半くらいだろう。身長は170cm程、黒髪は長く腰まであり非常に艶やかで、正に濡れ羽色と言われる物だろう。また顔は小さく非常に整つており、少なくとも日本人であれば、よっぽど特殊な嗜好の持ち主でない限りは美人、いや信じられないほどの美人と評するのは間違いない。

体つきは出るところが出ており、以前は82・62・78位が東司の理想だったが、それよりも少し胸は大きく腰は細いんじゃないかと思われる。とはいえたくなつては宗山を変えしているが。

ふつ・・・所詮、理想なんてより上質な理想が現れれば塗り代わつてしまつものさ・・・  
人が連れられぬ、悲しきサガと言ひやつだな・・・うむ仕方がな  
い・・・

「おはようじや主様。  
お食事にされますか?  
お風呂にされますか?  
そ・れ・と・も・・・」

「お? おおおお! ?  
朝やるテンプレではない氣もするけど、  
キタコレー?」

「起きざきのわづくわく! ?

「トペ・コン・ヒーロ?」

「いや、その理屈はおかしい」

「むう? なんでじや? ? ? 主様の知識によると、朝起こしに来たおなこは「お起きるーーー」と言いつつ飛び乗る物じやと思つ

たんじやがのう・・・

「絶対に俺の知識の中に前方一回転して飛び乗るおなじはない  
！」

小首を傾げながら、「ふむ、そうじやつたかの？」なんて呟いて  
いる自分の奥さんを見ながら、自分の知識だから自業自得とはいえ、  
なんでこんな明らかに余分な知識まで身につけるかなと嘆息しつつ、  
知識を与えた時の事。つまり一年前この世界に召還された時の事を  
思い返すのだった。

第一章 神と龍とナラコーマン やの三（後書き）

12月17日改訂

## 第一章 神と龍とサラリーマン やの四

第一章 神と龍とサラリーマン  
その四

起きたら田の前に全長30センチ前後のちつこい東洋風の龍が浮かんでいた。

「え? ドラゴン? ……やっぱり夢か……」

東司は寝起きが良いわけではないが、それは単にぐずぐずと微睡むのが好きなのであって、寝ぼけるタイプと言つ訳ではない。

（まあぶつちやけ、起きれないタイプと言つ奴であり、人はそれを駄目人間と言つ）

なので「夢か」と言いつつも、思考自体は普通に回転し始めており、夢と言つにはあまりにもハッキリしすぎている事に戸惑つ。

取り敢えず龍から眼を離し、周りを見渡してみる。

どうやら畳敷きの和室っぽい部屋で布団に寝ていたらしい。

和室っぽいというのは高い天井にシャンデリアがぶら下げられているからだ。

ここはどこのかぶれの家だと思わず苦笑した。

その時だった。

今まで全く動かなかつた龍が突然動き始め、右腕に咬みついてきた。

「うわっ、いたつ! -」

軽いパニック状態に陥りつつ、左腕を動かして龍を腕から払おうとするが、うまく振り払う事が出来ない。というか、龍が咬み付い

てこる腕」と動いて避ける為に触る事すら出来なかつた。

三度目のチャレンジが失敗に終わり、普通に振り払うのは難しい、何か方法！？と思つたとき、唐突に腕から痛みが無くなつた。龍が咬むのを止めたのだ。

龍は部屋の入り口の当たりまで、すいーっと離れていく。  
それを横目に見ながら咬み付かれた場所を確認した。

一つの小さな浅い穴のような咬み痕。ただし穴が空いている割には僅かに血が滲んでいるだけだ。

毒！？ 毒はあるのか！？ いや、蛇の毒は咬まれた直後から激痛があるって聞いたぞ？

夢？ やつぱり夢なのか？ いや？ 痛かった。さつき確かに痛かつたぞ？

夢なら痛くないとは限らない？ そうだほっぺただ。つねつてみるか？

いや、咬まれた痛みの方がほっぺより上だろ。

より痛い事？ いや、痛いのは嫌だな。他になんか無いか？

と焦りつつ自分の思考に潜つていると、急に声を掛けられた。

「初めまして、服部東司様。」

咬み痕から目を上げると部屋の入り口に和服を着た女性が正座し、畳に指を突きながら頭を下げていた。

「え！？ あ、どうもー・・・えーと・・・初めまして？・・・えーと・・・」

「私は名前をゴーフラン・ライエン・ゴラゴラと申します。」

女性は顔を上げ微笑みつつ名乗る。

腰まで伸びる艶やかな黒髪。十一単ではないが艶やかな着物姿。

姫といつ言葉が自然と思い浮かんでくる。

「あ、どうもご丁寧に……えーと俺……じゃなくて、私は服部東司で、じゃない、と申します」

正直ちょっと狼狽える。さっきから展開が急すぎるし、夢なのか何なのか訳分からないし、女性はすんごい美人だし……（ここ重要）

つかすんごい美人だし……（以下テンプレ）

一万ボルトだけど百万ボルトで、最後の天使がアリスな訳ですよ。ハイスマセン。自重しよう。

パニクってるな。なんだかテンションの浮き沈みが激しい。落ち着け落ち着け・・・

「えーと、済みません。ゴー・・・・えーと」

「ゴーフランとお呼びください。服部様」

「あ、はい。ゴーフラン・・・さん。・・・これは夢・・・じゃなくて、えーと・・・」はぢでショウカ？」

状況と展開が理解の範囲を超えており、何を聞いたら良いのかが浮かんで来ずに、ついつい”何を聞いたら良いでしょう？”と聞くところだった。やばいやばい。

「はい。服部様の質問には全てお答えさせていただくつもりですが、まず最初に一つ謝罪させてください。」

「え？ 謝罪？ ・・・ですか？」

「はい。一つは、先ほど腕を咬んだ事をお詫び申し上げます。」「へ？ 噛んだ？ ・・・何の事だ？ そんなボーナスタイムあつたつけ？」

「先ほどの龍が私でござります。服部様とお話しさせていただくのに必要でしたので、血をいたたく為に咬ませていただきました。」

サキホドノリュウ？？

・・・

先ほどの龍が私！？

え！ええええ！？

はあ！？ 何それ！？ ファンタジー！？  
やつぱり夢か！？ 夢なのか！？

やつぱり夢か！？ 梦なのか！？

「血をいたたく事で言語と共にその他の知識も授かりました。この姿も服部様の知識を参考にさせていただいております。」

「あーーーーーおかしいと思つたんだよ。つーか、なんなんだろ  
この夢。きれーなおねーさんは分かるけど、龍が出てきて咬まれる  
とか、俺はフロイト先生に何を求めてるんだ？　自分がわかんねー・  
・・」

「せん。」  
「君がおれの口に分かれただけで、おれは夢でここにいる

ユーフランさんのまっすぐな目に魅入られ、一瞬にしてパニック状態が解除される。

それは彼女が人間ではないという事を告げてしるにも関わらず、その目は嘘をついていないと信じられる、信じさせられる目だった。

そして彼女の綺麗な唇から、決定的な壊滅的な事実が告げられる。

「…・・・黙れ。」

•  
•  
•

イセカイ?

•  
•  
•

伊勢かい？

なんぢやつて

「うははは、うまい事言つた！！」

山田君座布団持つてきてー

あーはははは  
パニック復活！  
もう訳わかれ···。

## 第一章 神と龍とサラマン ノ五

### 第一章 神と龍とサラマン

#### その五

その昔、知り合いが”踊る阿呆に、見る阿呆。同じ阿呆なら踊らにや揃々”と言つ有名な音頭に対し、どちらにも参加しなければアホじゃないと自慢げに言い放ちましてね。

それを聞いて、よしんばアホじゃなくても、ド阿呆って話かもしれんべと思つた訳です。

ド阿呆はいかんよね、ド阿呆は。

人として、アホに為るのは良いけど、ド阿呆に成るのだけは避けないといけません。

なので、ド阿呆にならない為にも、

服部東司。踊ります！！

脳内が阿波踊り会場になり始めたその時、柔らかく温かい物に顔を包まれた。

いつの間にか田の前に来ていたゴーフランさんの胸に優しく抱擁されていたのだ。

「どうぞ落ち着いてください。」

ゴーフランさんは優しくそう言いながら、抱きしめたまま頭をゆっくりとなってくれる。

彼女に頭を撫でられる度に少しずつ脳内の阿波踊り会場が撤去されていく。

残されたのは祭りの後の様なじまと頭を撫でる優しい感触だけだ。

いつされていると、普段は忘れていた今は亡き両親の事を思い出す。

小さい頃、俺は母さんに膝枕して貰いながら頭を撫でられるのが大好きだった。それを見て親父が東司は小学生になつても甘えっ子だな。と笑つてたつけ。懐かしいな・・・

今は懐かしいだけで涙が出てこない程にはすれちまつたけど、この心が暖かくなる感覚、いつまでも撫でて欲しいと思つてしまふのは小学校から変わらないな。男は基本マザコンだという説があるらしいけど、今だけは否定できん。やっぱり男は今までたつてもママのおっぱいから離れられない生き物なのかもしれんわ。

・・・ん？・・・おっぱい？

・・・あるうええ？・・・この人ブラして無い事無い？ 事無い事無い？

さて、なんか落ち着いたのは良いけど、今度は別の意味で落ち着かなくなりそうだ？

いやー、だつてですよ、プリンプリンしてたら、ほわわんプリンで、それがいつの間にかプリンプリン。

何をいつてるのか・・・（中略）・・・味わつたぜ。

プリンだけにな（ぢや）

いかんいかん、別の意味で混乱しそう。

いや、ある意味既に混乱しているわけだが、まだ大丈夫。ふつちんプリンで言えば、逆さまにはしたけど、まだふつちんしていない状態？

何かの拍子にお皿に落ちてふるるんふるるんしたら、もつ食べちゃうしかなくなつちやうから早く元に戻さないと！

大体がだ。彼女は厚意でしてくれてるんだ。もっと紳士・・・じゃない（最近の紳士には変な意味も付加されてるしね）真摯な気持

ちで応じないとつけません。

「ありがとうございます。もつ大丈夫です。落ち着きました。」  
御礼を言つてコーフランさん精神攻撃から解放して貰つ。残念無念。

彼女は少し心配そうな顔をしながら、少し離れた位置に座り直した。

といふかさすがにそろそろね。

起きてる阿呆に、夢見る阿呆。同じアホなら馴染まにゃ損々。  
粟は食つても泡食うな。

つてね。

そもそも認めざるを得ないだろ。

これは夢じやあない。こんな現実感のある夢はあり得ない。現実・  
・・なんだろ。

先ほどの彼女の言葉を思い出す。

異世界・・・ね。眞実なのか担がれてるのか、どちらにしても、  
とにかく話を聞こへ。

まあ龍にしろ、この美人さんにしろ、これだけ手間掛けて俺を騙す意味は無いだろうから、本当に異世界なんだろうけどな。

「何でしたつけ？　あー・・・咬んだ。とか言つ話でしたね。血  
を飲む事で知識を得る。でしたつけ？」

「はい、テレパシーとか念話と呼ばれる能力も使えるのですが、  
共通の言語が無い以上、概念のやりとりになってしまいますので。  
・・俺・お前・頭・丸かじり・つまい、といづやつとりになります  
ね。」

あどけない顔で説明してくれるコーフランさん。

つか概念の説明に、何故それを選んだし・・・ちょっと怖いん  
ですけど。

ギャップ萌えしている俺を置いて話が進んでいく。といふか、俺

が進めていく。

「テレパシーが使えるんですか!?」

「はい。・・・とは言つましても、東司様の知識にある物とは少

し違ひ、能力を使う側が一方的に伝える事が出来るだけで、東司様の心を読む事は出来ません。」

「ああ・・・。そうか、そう言えば龍？ ですし、特殊な能力があつても、思議は無いつか」

「大思議に無いの？」

つたりな笑顔で話を続ける。

一です。先ほど私が頭を撫でさせていたたいたい時も、何を考  
えておられたのかは分かりません。もつと毛鼻を長くされてほした

「……」  
「…………」

ギヤー！！

ばれてーらー!? やつぱり紳士がまずかつたのか!?

いや、落が着て（とや）には指摘されない筈だ。

ヒトの心の構造

「ちなみに、血をいただいた時に東司様が知つて見える知識の他に、東司様の趣味嗜好、細かに申し上げますと闇の趣味まで伝わりましたので、お隠しいただかなくても大丈夫ですよ。」

なんだと?

いやいやいやいや、やつぱり幻覚だ。  
こんな綺麗な娘が女の子な訳がない。  
ちがーーーう!!!

こんな清楚な姫が閨の趣味とか言つ訳がない！！

「あ、もし信じられないことになりましたが、秘蔵の自慰用のお圭本の

内容ですか、前の彼女さんに振られる原因になつた、プレイの内容ですか、お話ししますが。」

「ひらは怒濤の如く押し寄せる衝撃に耐えるのに精一杯なのに、ゴーフランさんは、更に矢継ぎ早に攻めてきます。助けて……と言いますかですね。

「もしかして……それがゴーフランさんの地ですか？」

「ゴーフランさんがにやつと笑つ。

「まあ、そうじやな。厳密には違うのじやが、これからはこれが地じや。だから儂に遠慮する必要はないから。、畏まつた物言いをせんで、普通に喋るがよこて。」

唐突にゴーフランさんが碎けた口調になる。いや、ぐだけたつつか、何なんだその口調は。

あれ？え？もしかして俺の知識から取つた口調なの？

「ちなみに容姿は東司の好みにぴったりの箸じや。んでもつて口調は東司殿が持つていた人型の龍神のイメージを流用してあるの。とはゆうても、何人ものイメージを持つておつたので、はいぶりつどと言つやつじやがの。」

・・・

正直オーバーキルと言つ事なのか、幸か不幸かパニック状態には成らないけど、  
えええ、なにこれ・・・  
言いたい事はいっぱいあるが、まずはこれだけは聞かない訳にはいかない。

「あんたがうっぽいのも俺の趣味なの？」

「ふむ。これは趣味というか東司の持つてある龍神のイメージによるとこうが大きいのかのう。とはいえじや、東司はお馬鹿なノリに付き合つてくれるタイプが趣味じやから、やこは押さえておるよ  
あー確かに・・・

確かにそうなんだけど・・・

「後、東司の趣味に合わせて、夜はM氣味じや  
おつきい胸を張つてどや顔するコーフランさん。  
お願いですから性癖はばりさんで・・・  
もうお腹いっぱいです・・・

両手を床に付き、うなだれる東司。

その姿は横から見るとコーフランに土下座しているように見えた  
とか。見えなかつたとか。

# 第一章 神と龍とサラマン ナの六

## 第一章 神と龍とサラマン

その六

「なんじやなんじや 東司。呆けおつて。せつかく儂が許しを請つておひのじや、『許してほしけりや俺の物になれ』くらこは言わんかや。」

ゴーフランさんはにやにやと笑しながら、うなだれでいる俺をいじつてくる。

つーか驚愕の事実だ。

「俺、謝られてたんだっけ？・・・  
いや、ホントにそうだっけ？ なにかが違つてるよつな・・・  
「んむ？ そうじやよ？ 今なら謝罪を盾に、獸の様に体をむたばられても致し方なし。と、思つどる程じやよ。・・・じゃがの・・・  
・せめて最初くらいは優しくしてたもれ？」

神妙な顔をして上田遣いでこちりに流し田をくれるゴーフランさん。

うつ・・・可愛いやんけ・・・

でもね、確かに可愛いのは可愛いんだけど。

「口元だけにやけてんぞ。」

「おおっと、失敗失敗じや」

ゴーフランさんは口元に手を当てて、上品にクスクス笑う。  
わざとやつてやがんな？ 正直分かつてはいても可愛いと思つちやうのが悲しい・・・。

俺は嘆息を漏らしつつ言った。

「まあ謝罪は良いよ。体も何も求めません。」

正直もつたといない氣もしないでもないけど。状況が状況だし、相手は神様だしで、とてもそんな氣にならんですよ。・・・いや、

本当にもつたいねえ・・・

もつたないお化けが脳内に化けて出る前に話を進めよ。

「それより確か二つ謝罪があるとか言ってた気がするけど、まだ何があるの?」

「んむ・・・東司が、何故この世界にいるのか、と言つて話じや。」

「ああ、そういえば・・・て事は、コーフランさんがやつたって事かな?」

「残念ながら違うの・・・。そんな事がほいぼい出来るのは神だけじやよ。」

「へ?・・・あれ?さつき龍神とかなんとかって、言つてしませんでしたつけ?」

「んむ。つまりあれじや、言つならば、儂は下級神じや。で、東司を連れてきたのが絶対神といつことじや。まあ、絶対神とはゆうても、更にその上があるのかどうかは分からんがの」

あー・・・神様にも階級があるのか・・・まあ、有つても不思議は無いか。あれ?でも待てよ?

「でもそれなら、コーフランさんが謝る事じやないんじや?・・・ああ、上司の失敗を押しつけられた? みたいな物ですか?」

うわあ・・・神とは言つても中間管理職みたいな苦労があるつて事なんか・・・世知辛いなあ・・・

「というか、やつた当人・・・いや当神?は来ないんですか?」

「まあ来んじやろうなあ・・・といつかじや、儂もあつた事もなければ、話した事も無いからの」

「はあ?・・・あれ?・・・済みません。良く聞こえなかつたので、もう一度言つてもらえます?」

「つまりじや、人にとって儂は神様じや。ここから動かずとも人の営みを知る事も出来るし、奇蹟や大洪水を起こしたりも簡単じや。でじや、その神たる儂から見て神様といつことじや。一応、神がおる事だけは分かるし一方的に話しかける事は出来るがの。・・・まあ、儂が人からの呼びかけに応えなかつた様に、一度も見た事も声

を聞いた事も無いこと言つて、いつのまにか親を見て育つと言つかのつ。」

まあ儂は人の親ではないがの、と呟くコーフランさん。

「なるほどね。・・・あれ？　じゃあ俺をこの世界に連れてきたのが絶対神だつて何で分かつたの？」

「んむ。それは三つ理由があつての。一つは東司が何の予兆も余韻もなく、儂の目の前に現れたからじや。単純に突然現れたとゆうところではないぞ？　仮にじや、人や儂と似たような存在がそれを行つたとするじやろ？　すると東司が現れる前には予兆が、現れた後には余韻が生じるのじや。そんな事が出来るのは儂より遙かに上位の存在、つまり神の御技じやろうとこうじや

なんつーか、数多のフィクションに埋もれて育つた世代だし、大体は理解できるな。

「しかもじや、東司がこの世界に現れたのはこの場所なんじやが、その時ここは单なる水の中じやつたのじや

「水中？」

「んむ。水中。つまり水中じや

「そのまんまやん！　いや、そうじやなくて」

俺は周りを見渡す。部屋に窓はあるが、全て障子で覆われている為、外を見る事はできないが、特に水浸しだった様子はないよつて見える・・・

「この家は東司が来てから建てたのじやよ。」

「建てた？　・・・え？　どうやって？」

「東司と似たような見た目の種族の住む家を参考にしての、マジカル、マジカル、るるるるる、じや」

それで良いのか神様・・・

「まあそんな話はビリでもいいじやね。見たければひとつでもやってやるしの。」

いや？　結構どうでも良くないぞ？

黒髪ストレートでほんきゅつぽんなマジカル少女・・・

すつごい笑えるか。すつごいセクシーか。

うわあ・・・すつごい見てみてえ

俺が脳内のコーフランさんに、カボチャみたいなミニスカフレアスカートを穿かせている間も話は進んでいく。

「でじや、当然水中じやから、本来なら東司は溺れておったはずなんじやが、東司がこちらに来た時に体全体を包み込む特殊な力場に覆われておつての、それで溺れずに済んだ訳なのじや。・・・む、東司。聞いてあるのかの？」

脳内の想像がティロツトフィナーレを迎える始める当たりで妄想から呼び戻される。

「ん。・・・もちろん聞いてます。てーか俺にそんな力はないよ？ ふつーに一般人だつたし」

「怪しいのう・・・魔法少女辺りが怪しい氣がするんじやがの・・・」

「うぐつ・・・やべええ、つーか、やりにきー・・・

冷や汗を流す俺をジト目で見ながら話を続けるコーフランさん。

「まあ東司のゆう通りじや、東司の力と言つ事は、おそらくないじやうひ。神たる儂の力すら一切通さぬ、正に絶対防壁じやつたらの。」

「ああ・・・だから絶対神が関わつてると?」

「コーフランさんがゆつくりと頷く。

「ちなみにじや、東司がこの世界に現れてから、七時間その状態で寝ておつたよ。おそらく中では生命維持に必要な要素は何らかの形で補給されとつたんじやうひ」

それこそ正に神のみぞ知る。じや、とドヤ顔するコーフランさん。いや、そんなにうまくないから・・・

「そして最後の理由じやが、・・・同時にこれがもう一つの謝罪せねばならぬ事なのじや」

漆黒の瞳で俺の眼を見つめながら、ノーフランさんの唇が言葉を紡ぐ。

「儂が神に頼んだのじゃ」

「儂を終わらせるか、儂を終わらせれる者を送ってくれ、と」

俺を見つめるその瞳は、いつの間にか深紅の龍眼くと変わっていた。

## 第一章 神と龍とサラリーマン その七

第一章 神と龍とサラリーマン

その七

小説家になろう！

「へー面白いな。こんなのが有ったんだ。」

彼はラノベが好きだ。

このサイトを見つけたのも、某ラノベ出版社で”ウェブで大人気”というポップ付きで出版された小説の続きをいち早く読もうとして、たどり着いたのだ。

比較的読むのが早い範疇に入る彼が、ランキング上位や文字数が多い小説をあらかじめ読んだのは約一ヶ月後。

もちろん彼の趣味に合つ小説。合わない小説。あんまり趣味じゃないかなー、と思いつつも、ついつい展開が気になってお気に入りに入れている小説。諸々有つたが、色々な世界。色々な設定。色々なキャラクター。そう言つたものに大量に触れる事が出来るのは、来月出る新刊の前に既刊を読み返したりお気に入りを読み返したりで読書欲を解消していた彼にとって、新鮮かつ刺激的な、そして何より幸せな体験だった。

人は刺激になると、刺激が無い状態に不満を感じる様になる。例えそれが本来の状態であつてもだ。もちろん一・二ヶ月そのまま我慢していれば元に戻つたのだろうが、何の因果か彼の脳裏に「自分でも書いてみるか？」という（無視すりやいいのに）考えが湧いたのだった。

異常に設定に凝るのは中一の証と言つが、「中一（笑）」と笑うのは高一病、「高一（笑）」と笑うのは大一病、どれも楽しく読めたのだった。

「いいじゃん」と思つてゐる彼は中一上等とばかりに設定を考え始めた。正しく中一の鏡だ。

”小説家になろう”で、彼が読んだのはファンタジー系が多く、続々を待つてゐる事で飢えている彼が「なら俺も書く」とばかりに選んだのもファンタジー系だった。

んー、異世界に転生した男が神に貰つたチート能力で暴れまくる王道ものにするか。王道こそ正道だよなー。

あー、でも某幻想碎きさんみたいに、通常の能力 자체は普通で、一つの反則能力で活躍する感じのが良いかも？ 全く同じつて訳にもいかないし、どうするか・・・

神の力の内、数種類が使えるけど、使つたら倒れちゃう。とか良いかもな。

うん、強力だけど、弱点にも成つて良い感じ。

あつ、でも倒れたところを狙つてくる敵とか出した時、フォロー出来る能力を考えた方が良いかな？ んー要検討にしよう。

次は魔法だな。読んだ中だと取り敢えず四大元素に光・闇、あとは時と幻つて設定も多かつたな。ついでだから、なんか隠しも入れるか？ いや、逆に絞つて見るのも手かもしれん。

取り敢えず四大元素をググるか。

”古代ギリシャのタレスは万物の根源に「アルケー」という呼称を与え、アルケーは水であるとした。その他、アルkeeは空気であると考へた人、火であると考へた人、土だと考へた人たちがいた。

”（出典ウイキペディア）

ふむ・・・いつそタレスさんに従つて、四つに絞つちゃう方が一周回つて良いかもなー。

場所としては基本地球だな。世界の名前はテラ？ガイア？んーありがちだなー。やっぱオリジナルにしたいな、これ也要検討と。じゃあ、種族はどうしよう。人間・エルフ・ドワーフ・おつと、

忘れちゃいけないダークエルフだな。あとは・・・リザードマンに、妖精もいれるか。なんか他に無いような種族をいすれ出したいなー。これ也要検討だな。

竜もだすとして、どういう立ち位置にするかなー。敵？味方？んー・・・

設定を考える時間は楽しかった。考えれば考えただけ、面白いと思つてもらえると思える設定や展開を思いつけたと感じた。充実した、集中した、そして、とてもとても幸せな時間だった。

そして彼は六日間掛けて世界を考え、一日の休みを置いて、勇者の冒険談に取り掛かる。

初めて書く小説。町の描写、行動の描写、会話の描写。それどころか文末一つとっても、読むと書くでは大違いだと感じた。読んでただけの時は簡単そうに見えてて気づかなかつたが、難しかつた。苦しかつた。自ら読み返せば読み返すほど、心は折れていく・・・。

そして彼の挑戦は第五話で終わつた。

第六話として勇者は帝国を倒し、奴隸として扱われていたダークエルフを解放し、邪教信者として亜人間を弾圧していた宗教を正し、元の世界に帰りました。という投稿を最後に掲載終了したのだった。結局、彼の考えた設定の多くは明かされる事も無く。そのうち出すつもりだった凝りまくつたつもりの、古えの龍の存在も複線を匂わせただけで、結局日の目を見る事は無かつた。

掲載終了後、神は読むだけの人に戻つた。

\*\*\*\*\*

それは二万六千年ほど間、待ち続けていた。

特に何をするでもなく、宿命づけられた邂逅の為に。

何故それが宿命なのか、分からぬ。知らない。興味がない。

ただ、感じるだけだ。自分を縛るそのルールを。

宿命というルールにも二万六千年と言つ長き時にも、何も感じなかつた。

何故なら宿命の時まで感情を持たないルールだつたから。

ただただ、コラコラと湖にたゆたう。

だが、宿命の時が来たにも関わらず、宿命の邂逅は訪れなかつた。邂逅無きまま更に千年が過ぎた。

ルールから外れたその元に訪れたのは宿命とは関与しない者だつた。

本来なら彼等はその元に辿り着く事は出来ない筈の者達だつた。だが千年の月日が、彼等に神のルールに沿つたまま神の思惑を飛び越えさせる力を与えた。

そして彼等は宿命の者が「える筈の名前」をそれに「えた」。

湖底にただよう貴婦人。

ユーフラン・ライエン・コラコラ、と。

(貴婦人)・(湖底)・(ただよう)

そして、ユーフランは自我を得た。

第一章 神と龍とナラコーマン やの七（後書き）

12月24日改訂

## 第一章 神と龍とサラリーマン やのハ

第一章 神と龍とサラリーマン

そのハ

差出人  
件名  
宛先 (自分)

あれーなんだろ？ このメール。

彼がサンダバを立ち上げメールをチェックすると、見た事のないメールが届いていた。

いや、訳の分からないメール（おそらくはフィッシュングメール）自体は毎日大量にくる。例えば差出人の表示が自分のメールアドレスだったり、件名が”この間はどうも”だつたりと、色んな手で興味を持たせようとしてくるメールだ。だが差出人の部分が無記名になっているメールは初めてだつた。

「すげーな」

手がこんでんなー。こんな事も出来るんだ・・・

普段ならば開きもせずに迷惑メールフォルダ行きだが、今回は興味が湧いて、メールを開封した。まずは本文に眼が行く。

いつまで待てばよろしいのでしょうか？

勇者様はどうなったのでしょうか？

？？？

なんだこりや？ リンクがあるわけでもないみたいだけど・・・

待つ？ 勇者？

なんだなんだ？ 異世界転生フラグか？ キタコレ？

彼は数秒どきどきして待つてみたが、残念ながらいきなりモニターに吸い込まれたり、メールの文字が急にうねうね動き出す事もない。

「もちろん分かってましたとも・・・」

彼は誰にともなくそう咳き、ちょっと恥ずかしげりながらメールを右クリックする。

だが右クリックメニューからでは、ソースや差出人についての情報を探るコマンドは出てこない。ソースを見る気ならば、上のメニューインメニューから、表示・メッセージのソースを選択する必要があるのだが、彼は、まあ良いかとソースを調べる事を諦めた。と言うのも彼は自分がソースを見ても何をどう見れば良いのか知らない事を知っているので、何となくメニューを呼び出してはみたものの執着はしなかったのだ。

返信する気は無いが、取り敢えず返信ボタンを押してみる。メール作成用のウインドウが開くが、その宛先は自分宛になっていた。実は俺が知らないうちに自分宛にメールを書いていた！？ 訳ないか・・・

これはサンダバで宛先を決めない内に一旦保存した下書きに対して返信ボタンを押すと、宛先が自分になる事を経験で知っていたので、特に驚かず単に本当に差出人が分からぬ状況なんだな、とだけ彼は理解した。

しかし・・・

「勇者かー」

彼はふと一年前の事を思い出した。それは苦い、いや甘く苦い思い出だ。

彼は身悶えしトラウマを堪能しながら、メールを迷惑メールに指定した。

しかし話はそれで終わらなかった。

それから三日間、彼は憂鬱だった。何故なら差出人不明のメールがとんでもなく大量に届くのだ。それらは迷惑メールフォルダに直接行くとは言え、一回の受信時に数百という数のメールである。もはや迷惑だなとか言う感情はわからない。正直怖かった。

試しに最新の差出人不明メールをおそるおそる見ると、

勇者様がいないなら私はどうしたらよいのでしょうか？  
定めを果たす事ができぬなら、いつそ私を・・・

プロバイダに連絡し、件のメールを止めて貰うように話をしたが、メールサーバーにそのようなメールの痕跡が無いと素気なく告げられる。

うひい！、怖えええ！、ホラーかよ！。と背筋が冷たくなるが、プロバイダのお姉さんが言うには、類似例を聞いた事も無いしハッキリとは分からないが、ウイルスじゃないかという話だったので、彼はOSのリカバリディスクを取り出し、祈るような気持ちでクリーンインストールをかける事にした。

いつたい何なんだ・・・本当に呪いじゃなければ良いんだけど・・・  
てか勇者？無理矢理話を終わらせた呪いなのか？・・・

彼は一年前考えた小説の設定ノートを開き、当時自分で考えた設定に眼を通していく。

異世界転生者の設定、魔法の設定、世界の設定、種族の設定、そして複線以外では使わなかつたクラチカの生命体を見守る神であり、魔力の根源でもある四体の竜神の設定。特にその中でも異世界転生者たる勇者と結ばれ、勇者がクラチカに残る要因となるはずだった水を司る龍神。

彼は龍神についての設定を見た時、何かを感じた。

「！・・・これが？」

自分で訳の分からない事を言つてゐるな。とは思いつつも直ら  
が感じた感覚を打ち消す事が出来ず、取り敢えずこれをどうにかし  
ようと決める。

龍神の設定について消すか？ いやそれも余計に祟られそうだよ  
な。

龍神については触りたくないから、勇者を変えるか。とにかくハ  
ッピーエンドにしよう。

”勇者に名前を与えた勇者は結ばれる”に線を入れて消し、新たに、  
勇者が元の世界に帰った後に来た異世界転生者と結ばれる。と書き  
換え、FINと呟く。

そしてちょうどその時、OSのインストールが終わった。

以降、彼の元には差出人不明のメールは一度と届かなかつた。

\* \* \* \*

コーフランは百年間ずっと神に祈つていた。  
既に神の書いたラインから外れてはいても、神の定めたルールが  
コーフランを縛つていたのだ。

思いがけず名を、そして自我を得て後、すぐに勇者の存在を探し  
たが、世界のどこにも存在を感じられなかつた。”勇者と会い、何  
かをしなくてはいけない”それだけがコーフランの全てだつた。

コーフランに名前を与えた者達は、コーフランがいるジャングル  
の奥地にある巨大な深い湖の畔に神殿を作り、コーフランの事を神  
として崇めていたが、コーフランはその力で結界を張り、ずっと引  
きこもつて神に訴え続けた。

「いつまで待てばよろしいのでしょうか？」

「勇者様はどうなつたのでしょうか？」

「何故勇者様は来られないのでしょうか？」

「何故お答えいただけないのでしょうか？」

「私は何故勇者様にお会いしなければいけないのでしょうか？」「私の定めは変えないのでしょうか？」

もしその姿を他の人が見たのならば、敬虔な祈りを捧げているよう見えただろう。

だが、自我を持つてしまったユーフランにとっては敬いではなく、ただ必死なだけだった。

このまま更に時が過ぎれば、いずれ自らを縛るルールとの齟齬により、暴走する事になるだろう。水の魔力の根源たる自分の暴走。水の魔力が無くなつても水そのものではないため水が無くなる事はないが、暴走すれば全ての水が薬と変わらぬ物になつてしまつ。それは生命体の死と同意義だ。生命体を見守る役目を定められたユーフランにとって、それは決して看過出来ない事だった。

だが、もう限界が近かつた。諦念に捕らわれつつも、しかし一縷の望みに縋つて、いや全ての望みを掛けて、ユーフランは最後の願いを届けた。

「定めを果たす事ができぬなら、いっそ私を無くしてください。  
勇者じやなくとも良い。救いを御使わし下さい。」

いつもの様に神からの返事はない。

ユーフランの理性が暴走へと切り替わるのとした瞬間。  
目の前に人間がいた。

その時ユーフランの運命が変わった。

## 第一章 神と龍とサラリーマン やのハ（後書き）

12月24日 一年間ずっと神に祈っていた。→百年に修正

第一回 神と龍とサラリーマン

そのナ

「つまりじや、可憐にして美しく健氣でボインボイン。大和撫子イゴール儂とゆうても過言じやないどころか、お釣りが国家予算位くるほどきゅうとかつせくしいで、もいつちよボインボインな儂の、目眩めく色氣のピンくたいふうんに、神の奴めもめろめる。おっぱい！おっぱい！大事な事じやから一回言ひました。んで、その結果、東司が現れたという訳じや」

「その言ひ方だと、おつぱいのせいで転生せられたつてことにならんぞ・・・」

「うむ……苦しそうない。東司の憤りはよお分かるから、ほれ、恨みをばらすと言つ名田で儂の乳を好き放題するが良いぞ？」  
東司はほんつにおりぱいが好きじやの

やれやれじやと腕を組んで胸を寄せて上げるコーフラン。

「たーかーらーーーーーかあああ！ 確かに嫌いじゃあなー！ それは認めようーーー。むしろ大好きだー！。ふつはーーー、このおつぱいの為に生きてるよなー。とか、当然飲むなら乳番絞り生中中だよなー！。つて社長とおっさんギヤグで盛り上がる位大好きだー！」

ゲジシと並べ。す。

「これは、絶つつ対、謝罪とは言わね———。」「むうう・・・。じやがのう東司・・・」

なんだか申し訳なさそうな顔でユーフランが言いへ。

「それではおっぱいが好きなのか、おっさんギヤグが好きなのか分からんの？」

「そおおんな話してんじゃ、ね——！」

東司の慟哭とゴーフランの愉悦に満ちた笑い声が湖底に響き渡る。「大体、大体だな！俺がくるまで龍の格好だつたんじゃないのか？」。それでボインボインとかお色氣とかなんの話だ！？

「むうう。それはあれじゃ東司。龍ふえちから見れば辛抱たまらんかつたじやろうということじや」

「神様どんだけレベルたけー変態なんだよ！」

「こらこら、異種族の美的感覚を変態呼ばわりは褒められんの？。それに変態とゆうなら東司が昔の彼女……」

「わ、わーーー！。『めんなさい』『めんなさい』。もうそれは許してーーー！。いやー龍良いんじゃないっすかね。全然問題ないっすよ！」

「なんじゃ？、東司も龍ふえちかえ？。東司はほんつにレベルが高いのう。」

満面の笑みでいじつてくるゴーフラン。

「もう・・・、それでいいです・・・」

東司は泣きそうになりながら、がつくしと肩と落とすのだった。

今まで東司以外にゴーフランの笑顔を見た事がある存在はない。というか、対話した事自体東司が初めてだ。だからそれは誰にも、本人にも、ましてや神ですら判断がつかないだろうが、ゴーフランは本当にハイテンションだった。有頂天だった。生まれて初めての会話を心底楽しんでいた。

ゴーフランは最初に東司を見た時、自らの宿命が書き換わり、この男が自分の運命になつたのだと気づいた。だから東司の趣味に合う見た目。口調。性格の傾向を取得したのだ。それはゴーフランにとって宿命であり、龍神としての義務だった。東司には東司から知識を貰つたおかげで暴走は解除されたと、もつ大丈夫じゃ、と本当の事を伝えてはいけないが、実質問題として東司と結ばれなければ、また暴走するだろうし、今の感情を知った今となつては、今度は百

年も耐えられないだろ？

だが、コーフランは東司をからかいながら思つ。

儂は東司と結ばれたい。

神のルール？。義務？。そんな事もうぢつでも良い。東司の知識に”一目惚れに理由は無い”といふ言葉があつたが、儂の一目惚れには理由がある。ただそれだけぢや。

確かに神のお仕着せぢやつたり、吊り橋理論ぢやつたりするかもしけんが、この楽しい感覚、愛しい感覚、東司に想つて欲しいという気持ちに違和感など無いのぢやから。

ならば、それが儂の心で問題はない。

絶対に東司を落とすのぢや。

東司に義務ではなく求められて結ばれるのぢや。

欲しがります。番うまでは！。じや！。

おつと、とはゆつても番つてからも欲しがるがの、ヒクスクスク笑いながら自分で自分に突つ込みを入れるコーフランだつた。

「あー！もう謝罪は良いよ。許す許す。むしろ俺が許して欲しいくらい許す。」

だからレベル高い呼ばわりは勘弁してください、と呴きながら姿勢を正す。

「で、謝罪は置いといじ、とにかく質問なんだけど、俺は元の世界には戻れるの？」

だがコーフランさんはすぐに質問には答えず、口元に手を当てて何やらぶつぶつ言つている。

「むうおかしいのう・・・」されだけ言えば、『あーコン畜生！。こうなりややつてやうりあー』、『あーれー（ぱつ）』となると思つたんじやがの・・・

「え？。何？。どうしたの？」

「いやいや何でもないのぢや。元の世界だったかの？。少なくとも儂一人の力では無理ぢやの。」

「ん？。一人じゃなければ出来るの？」

「あくまでもかもしれん、じゃよ？。儂は水の魔力を司つておるが、他に土・火・風を司る竜神があるのじゃ、そやつらの力が借りれば異世界移動が可能かもしれん。と言つた所じゃ」

「地水火風・・・・四大元素つてやつか。あと三人と考えれば、七個タマ集めるよりは少ないけど、協力してくれるように説得付きと考へると、ハードル高いのかな？・・・」

ユーフランはそれを聞き、儂は絶対に協力せんから高いと言つより不可能じやがの・・・と横を向きつつこつそり咳く。

「その三人の場所つて分かるの？」

東司は自らの予定を根本から否定する最大勢力が目の前にいるとは露とも知らず、すまし顔をしている最強の敵対勢力に向かつて質問する。

「どうかじや、その前に一つ大きな問題があるんじゃよ。」

「え？、まだなんかあんの？。龍だけにクエストしないとダメとか？。まさかバスター？。協力して欲しければ俺に勝つてみろ！。とかだつたら泣ける・・・。俺は低レベル勤め人なんで99まで程遠いよ？」

「99までいつても、職業勤め人が戦うのは無謀じやろつな。いや勇者でも賢者でも無謀な事は同じじやがの。・・・そうじやのう、逆に最終形態のグレン ラガンにはまるで勝てる気がせんの。」

「無理だよ！。どこまで突破しなきやダメなんだよ！。俺を誰だと思つてやがる！。だよ！」

つーかまずはコアドリルが無いと穴掘り東司にすらなれんぞ。

「最後の”だよ！”に照れを感じるのう・・・。まあそれは置いてじや、問題というのは、東司がどこから来たのか分からんと言つ事じや」

「どこの？・・・。地球だけど・・・つてその情報だけじゃ無理つてこと？」

ユーフランは大きく頷き言つ。

「さつき儂は東司がここに来た時の事を、何の予兆も余韻もなく突然現れた、とゆうたと思うんじやが、予兆や余韻があれば元の世界を特定できたやもしれんが、現状まるつきり手がかりなしじゃ。言つならば検索機能無しの直URL打ち込みで、名前すら分からんサイトを探すような物じやの」

東司がその手の打ち様の無さに、うげつと呻く。

「それにの、東司がこちらに来た時の手法が良く分からんのじや。例えば神が東司を一人に分けてそのうち一人をこちらに送つてきた場合、戻れたとしてもそこには既に東司が普通に暮らしておる可能性もあるし、逆に単に失踪扱いかもしれん。戻つてみると分からんの。シユレデインガーの猫みたいな物じやな。あとは時間の問題もあるやもしれん。つまり戻つても既に十年・百年と時代が違つとる可能性もあるということじや。そう言つ意味では東司には残念じやが、戻るというのは余り現実的な選択肢ではないのじやよ」

「そーか・・・・、戻れないのか・・・・」

東司は、思つたより全然ショックがあるんだな、と呟いて布団に倒れ込む。

ゴーフランは東司の翻意を願つて一気に説き伏せるつもりだつたのだが、自らの口論見がつまくいつてない事に焦つた。いや、と言うよりも何が何故うまくいつてないのか分からなくて焦つたと言つべきだろ？

「と、東司？・・・・そ、そりぢや！。寝るなら添い寝でもどうじや？」

「・・・・あー「ごめん。ゴーフランさん。ちょっとだけ一人で考えさせてもらえるかな？」

「あ・・・・・うん・・・・」

東司は天井を見つめたまま部屋に残り、ゴーフランは項垂れたまま部屋を出て行つた。

ゴーフランは寝室を出てから居間のちやぶ台に突つ伏すまでずっと

と頃垂れたままだった。いや、突つ伏しても頃垂れているのに変わりはないか。

彼女は今、恥ずかしかった。後悔していた。反省していた。

自らが余りにも浮かれていて、自分の目的、自分の気持ちを成就させる事しか見えていなかつた事に気がついたからだ。

だが、あえて第三者的視点で言わせて貰えば、今回の事ははしょうがない事だつただろう。何しろ東司の知識を吸収しているとは言え、舞い上がるのも初めて、他人の気持ちを考えるのも初めて、そして自分を省みるのも初めての経験なのだから。

人間の感情にマニュアルはない。一足す一が所詮概念の上でしか正しくないのと同じで、人間の感情の動きを決まり切つたパターンにはめる事は出来ない。ユーフランは東司の知識に非常に大切にしているモノ（つまり人間関係であつたり物であつたり地位とかだ）が無かつた事で勘違いをしたのだ。

実際の所、東司の知識には、彼にとつてそこまで大切なモノというカテゴリーは無いが、しかし人は生きている限り、大なり小なり大事なモノ、気に入っているモノが必ず生まれる。例え小さなモノでも、そう言つたモノが集まれば大切なモノが無いからと言つて、決して軽視できる事ではないだろう。大体が急に問答無用で見知らぬ、しかも帰れない場所に連れ去られて、帰りたくないと思う人間は言うほど多くはないはずだ。

もしユーフランが別の世界に飛ばされたとしたら・・・

例え神のルールが無くとも、泣き悲しむだろう。慣れ狂うだろう。どうやつてでも東司の元に帰ろうとするだろう。だと言うのに、如何に会話を楽しむのか。どうやつたら東司の気が引けるか。なんとしてでも東司に帰るのを諦めさせるか。といつ自分の事しか考えていなかつた。

「儂はもつと、東司の気持ちを考えるべきじゃつた。」

その後悔はユーフランの心を強く締め付けた。

だがどうすれば良かつたのか。

東司を帰す事はとてもじゃないけど耐えられない。

それに自分の気持ちを除いたとしても、この身はルールに縛られている。

そんなユーフランの反省と義務と欲望の三疎みの葛藤ががいよいよ五時間に及ぼうという頃、彼女は一つの結論を無理矢理だした。

でも！、それでもじゃ――

嫌じや！、絶対に嫌じや――

離れとうない！、帰しどうない――

話したい！、睦み合いたい――

一緒にいたい――――

ユーフランは立ち上がり寝室に戻っていく。

彼女は言わない、使わない、と決めていた神のルールについて話そうと思っていた。

東司が帰つたらこの世界が滅ぶと、その罪悪感の鎖に繋いでしまおうと決めていた。

客観的に見れば、東司が元の世界に戻るのはとてもなく難しく、時間を置けば諦めるだろうから待てばいいだけなのだが、それでは自分の方が心代わりしそうだったのだ。

ユーフランは意を決して寝室の襖を開ける。

部屋から東司の声が聞こえてくる。

「ギガア　ドリルウウ　ブ・・・・・」

東司とユーフランが見つめ合つ。

東司の顔が青くなり、赤くなる。真つ赤っかだ。

ユーフランの顔は変わらない。動かない。いや動いた。

ユーフランの瞳から涙がこぼれていく。

そんなに元の世界に戻りたいんじやの。

グレン ラガンまで天元突破してでも帰りたいんじやの。

「いや、あのこれは・・・、なんというか・・・」

東司が真っ赤な顔で焦つて言い訳を始めるが、ユーフランはそれを遮つて、自らの望みを裏切つて、心からの言葉を伝える。

「安心するのじゃ東司。儂が絶対に元の世界に帰すよ。」

ユーフランは泣きながら微笑んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3887z/>

---

龍の使い

2011年12月25日15時46分発行